特集

私の寿命と人生

長寿を寿ぐ時代は終わり、いまはみなが寿命を持て余している。死ぬのが難しい世の中なのだ。人間は死によって完成する。しからばどううまく死ぬか。死を考えながら生きる人たちの卓見をお届けする。

俺が死んだら もう俺を語れる奴はいない

梅宮辰夫（うめみやたつお）
俳優
1938年満州生まれ。日大法学部在学中に東映ニューフェイスに合格。『不良番長』や『仁義なき戦い』といった映画作品に加え、テレビドラマにも多数出演。

それこそ、このあいだ松方（弘樹）が亡くなった時もそうだったけれど、「昭和の名優」が亡くなると僕のところに取材が来るでしょう。でも、僕が死んだ時に、誰が取材を受けるのかと考えるとね。同時代を生きて、僕について語れる人はもういないんですよ。僕は昭和の生き残りですからね。これだけ周りが次々に逝ってしまうと、むしろ、僕だけが長生きし過ぎているんじゃないかと思うことさえあります。

たとえば、僕にとって憧れの存在だった石原裕次郎さんは52歳で、あんなに達者だった鶴田浩二さんも62歳で亡くなりました。いまにして思えば、先輩方はやはり寿命で死んでいったんだな、と思うんです。そう考えると、やはり僕は異常に長生きしている気がしますね。

僕がいま、「昔はよかったなぁ」としみじみ語り合えるのは、渡のてっちゃん（渡哲也）くらいかな。ただ、彼も体調を崩してからだいぶ経つでしょう。僕はてっちゃんの病状が気になって、弟（渡瀬恒彦）と連絡を取り合っていたんです。そうしたら、一昨年に「梅宮さん、兄貴よりも俺のほうがヤバいかもしれません。これから治療を受けることになりました」と言う。それで、病状が分かったら連絡しろよ、と伝えたんですが、そのまま今年3月にこの世を去ってしまった。1月に松方を亡くしたばかりだったから、余計にさみしく感じましたね。

でも、「惜しい人を亡くした」とか、「早過ぎる」とか、よくそういう言葉を聞きますが、やはり寿命というものはあるんだと思う。僕も来年の3月11日に傘寿を迎えるのであと3、4年でお迎えが来ても文句は言えません。高倉健さんもペギー葉山さんも享年83だから、もう僕もそれほど長くはない。

元気で長生きできるならともかく、他人の世話になりながら生き永らえるのは嫌なんでね。女房にもそう言っているんです。まぁ、女房は立場上、「長生きしてよ！」とは言うけどさ。実際には早く死んでもらって、保険金が手に入ればいいなと思っているかもしれない。

いや、それが本音だと思うんです。男は家長として稼ぎがなくなったら「粗大ゴミ」ですよ。そうじゃなかったら、男なんて無用の長物。テレビの健康番組ではやたらと「長寿」を持ち上げますが、さすがに限度はあって、どこかであの世に旅立たないといけない。あんまり長生きしても周りの人にすれば有難迷惑だと思いますしね。まぁ、わが家は女房に娘、孫、それに3匹の飼い犬を含めてみんな女だから、男の僕がいないと格好がつかない部分はあるんでしょうけれど。

「余命2ヵ月」

僕にとって人生観や死生観を見つめ直す最大の転機となったのは30代半ばでがんを患ったこと。僕は昨年、十二指腸乳頭部がんの手術をしましたが、それより40年以上も前に見つかったがんによって、人生観がガラリと変わったんです。

発端は1974年の夏。片方の睾丸が急激に腫れ始めて、指で触るだけで痛みが走るようになりました。それで、戸越銀座で開業医をしていた親父に相談したものの、「炎症を起こしてるだけだからすぐに治るよ」と取り合ってくれなかった。その言葉を信じて放っておいたら、ピンポン玉くらいの大きさにまで腫れ上がってね。結局、親父の飲み友達の町医者に頼んで、同じ年のクリスマスに切除してもらったわけです。

ただ、摘出した睾丸の状態が明らかに異様だったようで、親父が別の総合病院に持ち込んで検査してもらったら「がんが進行しています」。しかも、「町医者で手術をした？　なんて軽率な……」、と。肺に転移している可能性があるというので1週間に1度、レントゲン写真を撮影することになったんですが、その時点では僕自身はがんを告知されていませんでした。しかし、まもなく左の肺に白い影が丸く写ったようで……。両親は担当医から「30代と若いのでがんの進行も速い。肺に転移すると8割近くが厳しい」と言われたそうです。最悪の場合、「余命2

ヵ月」とも。その頃は実家に帰る度、おふくろが泣きながら僕のことを送り出すんですよ。「あなた、大事にしてね……」って。けれど、僕は自分ががんと知らされていないから、「おふくろも年だなぁ。こんなに涙もろくなって」と思っていました。ただ、そのうちに両親と担当医の反応から薄々勘づき始めてね。最終的には、がんという現実を受け止めて抗がん剤治療に踏み切りました。

とはいえ、当時の心中は「後悔」の一文字でしたよ。72年に女房とできちゃった結婚したばかりで、娘のアンナもまだ2歳。こんなに早くお召しが来るのなら、結婚なんてするんじゃなかった、子供なんて作らなければよかった——。もう、そればかり考えていました。

結果的には、放射線と抗がん剤を続けたことで奇跡的に肺から白い影が消えたんです。治療の副作用も軽くて、髪の毛は一本も抜けなかった。それでも不安が消えなかったのは、うちが代々「がん家系」だったからです。実際、親父は5人兄弟ですが、全員が胃がんで亡くなっている。だから、肺がんに罹ってからというもの、「もう先は長くないな」と感じることが多くなりました。一度がんを経験した以上、いつまた再発するか分かりませんしね。

生活を改めたのはそれからです。僕が家族と過ごせる時間は限られている、それならば、一分一秒でも長く家族と一緒にいたいと考えるようになった。遊びもピタッとやめにしました。

しばらくして、京都の撮影所で撮っていた『必殺商売人』というドラマにレギュラー出演したんですが、その時も仕事が終わったら必ず東京の自宅に帰りましたね。どうにか夜の8時頃までに撮影を終わらせてくれるよう頼み込んで、いつも同じタクシーに乗って京都駅に向かった。そのタクシーの運転手さんは京都の地理に精通していたので、どんなに撮影が押しても東京行きの最終の新幹線にギリギリ間に合うんです。もちろん、そんな時間に新幹線に乗ったところで、自宅に着く頃には娘はとっくに夢の中でした。それでも、アンナの寝顔が見られるだけで構わなかった。翌朝は早朝5時に飛び起きて、始発の新幹線で京都にトンボ返りです。がんになるまでは自分がそんな生活を送るとは思いもしなかった。本当に人生観が一変したわけです。

結婚する以前は、誇張ではなく本当に毎晩、銀座に通っていたからね。昭和の時代なので、とにかく映画俳優はモテました。いまのテレビタレントなんて全く目じゃない。最近はバラエティ番組で街頭ロケをしても、周囲の反応は「おっ、撮影してるな」くらいだと思います。でも、当時は、銀座の夕景をバックに撮影すると出勤前のホステスが群れをなして集まったものです。当然、「キャーー!」という地鳴りのような嬌声で芝居にならない。制作進行のスタッフが「すみません! お静かに願います!」と声を張り上げてもかき消されてしまうんだ。そのうち、「辰(た)っちゃーん、終わったらうちに寄ってね!」「なによ、うちのほうが先よ!」なんて声が聞こえてくる。こっちも悪い気はしないから、「おーおー、分かってるよ。でも、今夜は3軒しか行けねぇぞ!」なんて返していました。

まだ僕も若かったからね。20歳で東映ニューフェイスに受かって、銀座で遊び始めたのは26、27歳の頃です。東映は東京と京都に撮影所がありましたが、メインは時代劇を撮る京都でした。僕が所属していた東京撮影所には健さん(高倉健)以外にスターがいなかった。裕次郎さんや勝新太郎さん、宝田明さんといった他社のスターは銀座で飲み歩いているのに、東映の俳優は銀座に繰り出さない。映画俳優が銀座で飲まないと格好がつかないよな、という雰囲気もあって、僕も若いなりに突っ張ろうと考えていた。東映の看板を背負って遊んでいるという気持ちもあったと思いますね。

もちろん、20代の駆け出しですから金はないんですが、あの頃は「お金はいいから遊びに来て」というママやホステスがいたんです。映画俳優が顔を見せるだけで店としては鼻が高かったんでしょう。クラブの扉を開けたら、他の客についているホステスも含めて全員が一斉にこっちを振り向く時代だから。「あっ、梅ちゃんだ!」ってね。ホステスがこっちのテーブルにつきたくてソワソワし始めるから、他のお客さんはムッとしていたみたいです。時効だろうから話すけど、「お会計はあっちで鼻の下を伸ばしてる客につけとくから心配しないで」なんて言ってくるホステスもいましたよ。

反対に、「裕次郎さんが近くのクラブで飲んでいるみたいよ」と聞くと、コッソリとのぞきに行きました。すると15、16人ほどのホステスに送られて裕次郎さんが颯爽と店を出てきて、ベンツのスポーツカーに乗り込むんだ。カッコいいなぁ、早くあんな車に乗りてぇなぁ、と。そういう時代でした。

「まだ健全だな」

そんな銀座通いもがんを機に一切やめました。それからの40年余りで、銀座に足を運んだのは数回だけしかありません。古い友人が東京に出てきて、付き合いで顔を出した程度です。1日でも長く生きたいと思って必死だったんでしょう。1日に70本吸っていたタバコをやめたのもその頃です。ハイライトを3箱半吸っていましたが、パタッとね。

それ以降、大病を患わずに来られたのも、あの時に生活を変えたからだと思い

ます。実は、5、6年前に初期の胃がんが見つかったのですが、その時は非常に優秀な先生が内視鏡手術で切除してくれてね。患部を傷つけるとがん細胞が飛び散るというので、がんの周辺部を煎餅のようにきれいに剝ぎ取る手術で事なきを得ました。

ただ、昨年の十二指腸乳頭部がんだけはさすがに大変でしたね。何しろ、十二指腸と胆のうを全摘し、膵臓と胃の一部を摘出する、12時間の大手術ですから。そんじょそこらの手術ではないし、自分の年齢を考えても体力的にはかなりきつい。俳優として復帰できるかも含めて手術前には本当に悩みました。

最初に診断してくれた先生に「この手術をしないとどうなりますか」と尋ねたら、「このまま放置しても1年間は変わりなく生活できるでしょう。でも、2年後には合併症を引き起こして、痛みを感じるようになる。そして、3年経ったらお別れすることになりかねない」。

それを聞いて考えましたね。女房にも「おまえは手術したほうがいいと思うか」と相談を持ちかけましたが、「あなたが決めてちょうだい」と言うばかり。まぁ、それはそうだよな、自分で決めるしかないよな、と。そんな時、手術を担当してくれることになる先生が「院長を含めて全面的にバックアップします」と言ってくれてね。手術だけでなく、術後のアフターケアまで任せてほしいという。それで踏ん切りがついたんです。

手術は大変でしたが、いまのところ術後の経過は順調そのものです。先生の言葉通り、術後の入院生活では看護婦も親身になって世話をしてくれました。

でも、そんな看護婦が今になって、「梅宮さん、私のお尻を触ったの覚えてます?」と聞いてくるんだ。僕が「ええっ! ウソだろ」と言っても、「いいえ、証人がいます」って。痛み止めの麻酔を点滴されていたせいで入院中の記憶はほとんどないんだけど、それを聞いて僕もまだ健全だなと思いましたよ。

他にも入院中はよく夢を見て、とっくの昔に亡くなった鶴田浩二さんが見舞いに来たりとか、ヒラリー・クリントンが原宿の交差点で選挙演説をしてたりとか。あと、これも夢ですが、うちのマネージャーが「菜々緒さんがお見舞いに来てます」って言うんです。僕は菜々緒の大ファンだから、まだベッドから動ける体じゃないのに廊下まで飛び出しました。そうしたら、あき竹城がいる。それで、マネージャーに「どこに菜々緒がいるんだよ。あき竹城みたいなオバサンしかいないじゃねーか」と言うと、「菜々緒さん、化粧を落とすとそういう顔なんです」だって。もう幻覚もいいところですよ。

去年の大手術で、改めて寿命というものを意識したのは間違いありません。ただ、正直なところ、僕はもう芸能界に未練はないんです。

昔はどこの劇場でもオールナイト上映をしていて、僕ら俳優は反響が気になってよくのぞきに行きました。深夜にもかかわらず、劇場は仕事終わりの銀座のホステスやバーテンたちで大入り満員。客席から溢れた観衆は階段に新聞紙を敷いて座り込み、握り飯を頬張りながら「よっ、健さん!」「裕ちゃん、いいよ!」

とスクリーンに声を掛けている。いまの芸能界の状況を見ていると、とてもあの熱気を取り戻せるとは思えません。

そもそも、平成の時代に僕らのような「不良性感度」の高い俳優は通用しないんです。最近は貫録もなければオーラもない芸能人ばかりでしょう。やはり、芸能人には「掘り起こしてきた」感じがないとダメなんだ。一体、どこで見つけてきたのか、というくらいの圧倒的な存在感が必要だと思いますよ。でも、日本の芸能界には、昔の良かった部分に学ぶ気持ちが極めて希薄です。現状だけに乗せられて、自分も一緒になって走るだけ。そんなことで優れた作品が生まれるわけはないと感じます。

では、なぜ俳優を続けているのかといえば、あの世で待っている健さんや裕次郎さんといった先輩たちに芸能界の現状を報告したいからです。そのためにも、最後まで見届けるつもりです。残念ながら、先輩方には「いまの芸能界はひどいことになっていますよ」と報告する他ないと思いますけどね。

45

ガン手術8回の死生観

黒沢年雄（くろさわとしお）
俳優
1944年神奈川県生まれ。64年に東宝ニューフェイスに合格。『日本のいちばん長い日』などに出演し、歌手としても『時には娼婦のように』がヒットした。

何しろ、73歳までに経験したがん手術は計8回を数えますからね。言うなれば僕は「がんのベテラン」です。もちろん、告知されることが怖くないと言えば嘘になりますが、若い頃のように「がん＝死」と捉えて塞ぎ込んだり、自暴自棄になることもなくなった。最近は、ドラマの撮影現場に出かけるのと同じ感覚で「行ってきまーす!」と女房に声を掛けてがん手術に臨むほど。それどころか、「これでまた保険金が貰えるな」と能天気に考える余裕もできました。

とはいえ、そこまで達観できるようになったのは「経験」を積んだからに他なりません。1992年に最初の告知を受けた時は、それこそ、奈落の底に突き落とされたような絶望感を味わいました。

当時の僕は48歳の働き盛り。実は、告知に遡ること3年ほど前から便に血が混じるようになって、掛かりつけの内科医にも相談していたのです。ただ、主治医の診断は「痔」だった。いまとなっては笑い話ですが、その言葉を信じて延々と座薬を入れていました。まさか、自分がガンに罹っているなんて考えもしませんでした。

しかし、その後に家族でハワイ旅行をした際、ホテルで大量の下血に見舞われましてね。真っ赤に染まった便器を目の当たりにすると、さすがに動揺を隠せませんでした。そして、ようやく主治医の痔という診断に疑問を抱き、テニス仲間